

本

1978年12月号

読書人の雑誌

講談社



1978年12月号 読書人の雑誌 講談社

ハイテツガーに会った日

下店栄一

ハイテツガー哲学と私

ハイテツガーも逝って、二年以上たった。ハイテツガーの日本における受け入れとその影響は、現代の西欧のどの偉大な思想家よりも大きいのではないかと私には思われる。

ハイテツガーの思想については三木清が一九二七年にいち早く『存在と時間』の紹介をして以来、哲学アカデミズムのみならず、一般の思想的潮流の一つとして、ハイテツガーの思想の影響は今まで続いているようである。

私も例外ではなく、ハイテツガーの思惟との出逢いは古く、色々な意味で私の思索に決定的な影響をもつ。問題提起にせよ、方法論にせよ、その虜になり、模倣し、そして長い長い対話と、そして苦しい対決の時間がある。

我々よりも一世代前のドイツの古典文学者達がその憧れのあまり、晩年になるまでギリシャの地を踏むのをためらった様に、私にとってはハイテツガーは語るべきさはばかられる、眼前にそびえ

立つ巨大な、それでいて一番親しい身近な思想家であった。そんな訳で、私のこの最初にして、最後の出逢いも、今迄誰にも語らず、ひそかに心の中にいだきつけて来たエピソードなのである。しかし、この訪問記は記録しておくべき事柄も少なからず含んでいると信ずるので、彼の死をしのびつつ、書き記すことにした。

一層根源的なものへの還帰というハイテツガーの思索は、フッセールのやや近視的ときえ言える詳細緻密な、一步一步細い索条をたぐり、逆行してゆく解明の分析志向とはちがって、西洋の哲学史全体をカッコに入れて、その包括的見透しの上に哲学そのものとその問いを捉え直し、哲学的自明性として忘却されていた地平を主題的に明らかにすることによって、西欧の伝統的な思索の根本的な態度変換を歴史的に必然ならしめたという点で、革命的意義をもつと言ってよいであろう。

今後、アメリカを含めた西欧の哲学がどの様な方向へ展開して行くにしても、ハイテツガーの思想を除外して二十世紀の哲学は語る

れることはないと言つてよいであらう。

ただ彼の思索がギリシャ語、ドイツ語の多義性——特にその根源的な意味——を手掛りとしているというむつかしさはあるにしても、ハイテッガーの思索がいつも見つけているものは彼自身の言葉にもかわらず、言葉のみにたよるものではない。

哲学者の「目」においては、現実はおおわれることなく、「見」つめられていなければならない。有限な我々にとっては、それは有限な仕方で見られていないにしても、あるいは、はるか彼方にかすかにしか見えていなくてもである。

西欧的な思惟の限界というものに不可避的にとらわれていたにしても、ハイテッガーは目の見えた思想家であった。そして、その西欧的な限界も「不十分」ながら自覚し、その克服を目指してもいた。彼が自らを哲学者と呼ぶことを好まなかつたことにも、その志向が現われていると言つてよいであらう。

彼は真に西欧の伝統そのものを内から引き受けることによって、それを否定し、それを超えていたと言える。その意味でも、ハイテッガーは二十世紀における最も西欧的な思想家であつたということも出来るであらう。

ハイテッガーの問いとその方法、そして彼が見つめつづけていたものにはたか返ることによつて、我々は現代における我々の本来的な思惟を可能にすることが出来るであらう。

哲学者の周辺

私が関西学院大学名誉教授片山正直先生のお供をしてハイテッ

ーを訪れたのは一九六六年十月二十八日、秋も深まった一日であつた。

片山先生は、アメリカではティリッヒやマイケルソンを訪問され、又、ヨーロッパに來られてからも、ヤスバース、ブルトマン等の世界的に著名な思想家、神学者をすでに訪問されていた。

今度はハイテッガーをお訪ねになるということで、当時マインツにいた私に、一緒に行つては……という又とないお誘いを受けたのであつた。

私の学位請求論文も、ようやく終りに近づき、又秋のシュヴァルトヴァルトもどんなに美しいかとも思われ、それでは車の運転手としてお供をさせていただきましようということで御一緒させていただくことにしたのであつた。

当時の住所録によると、ハイテッガーの住いはツェーリンゲンというフライブルグの郊外（正確にはA78V Freiburg/Zähringen, Riebuchweg 47）にあり、庭は広いが割と質素な木造のやや小さい二階建てで、汽車の線路のガード下をくぐつて、シュヴァルトヴァルト側に出るとすぐ右に——フライブルグの方向に——折れ、少し小高くなつた道をのぼると、比較的古い家並みにあつた。

道路に面しては木の柵があつて、五つぐらいの可愛い男の子がその前で三輪車にのつて遊んでいた。ハイテッガー家には番号が見えないので、念の為通りすぎたが、そこに間違いないのを確かめたので車を止め、避んでいたその男の子に

「坊やのお祖父様はハイテッガー教授かい」

とたずねると、

「ヤー、ヤー、アイン、メモント！」

と言つて家の中へかけ込んで行つた。

と折り返しに、白髪の上品な老婦人が出て来られた。ハイテッガー夫人であることを確かめた上、片山教授が日本からハイテッガー教授を訪問すべく来られたこと、突然の訪問の失礼のお許しを乞うと、

「どうぞお入り下さい。丁度主人は今在宅ですから。ところで、貴方は英語を話されますか？」

ハイテッガー夫人はどうかやうやら日本からの訪問者には大変慣れた感で私にたずねられた。

「勿論ですが、今ドイツ語でお話をしていたのでしたが……」

と私が言うと、ハイテッガー夫人は大きく笑つて

「ああ、そうでしたね。日本から来られる方はどうもドイツ語が良く分らないものですから。大変失礼しました。さあさあお入り下さい」

と片山先生の手をとるようにして、二階のハイテッガーの仕事部屋に案内されたのであつた。

その折、玄関の扉の上の横木に

„Behüte Dein Herz mit Fleiss. Daraus Kommt das Leben.“

(勤勉をもつて心を護れ。△まことの△生はそれより生ずるのだ。) という二行が刻まれているのが深く心にとまつた。

私の恩師三宅剛一先生から、ハイテッガー夫人というのは割とそつけない感じのひとだと聞かされていたので、この厚意ある対応には、私はほっとして、ハイテッガーの仕事部屋を見廻した。

窓は一つであつたが、東南(?)に向つて大きく開いており、仕事机はその窓に向けておいてあつた。古色蒼然とした檜の大きな机に、ひじつきのついた大きな皮張りの椅子も、ひじかけの丁度手がしょつちゅう当る部分の角の皮がやぶれて来るほど使い古された感じ、坐るところもスプリングがいたんでいるのか、坐布団のようなものが二枚も重ねて敷いてあつた。

学者の仕事部屋らしく、他の三面の壁は本棚になっており、やはり本がびっしりつまつていた。窓外の秋晴の明るさのせい、部屋の中は何となく暗い感じで、部屋のまん中に円いテーブルと簡素な椅子が二脚おいてあつて、私達はそこに坐つて、ハイテッガーが現われるのを待つていた。床にはトルコ風のカーベットが一枚敷いてあつた様な気がするのだが、今は記憶が定かではない。

窓からは既にかり取られた麦島が一面に見渡され、その背景にはシュヴァルツヴァルトの山並みが見えた。

この机に向い、この椅子に坐つて、この島と山々に折にふれて目を遊ばせながら、ハイテッガーはあの強靱な思索をコツコツと展開して行つたのであろうか。眼が慣れてもなお暗い感じのその部屋で、私は彼の思惟とその記述のあとを色々と思い返し、想像していった。

と、ゆっくりと老人らしい足音が階段を上つて来るのが聞こえ、うしろの入口からハイテッガーが現われた。

レコードで知つていた、あの一寸かすれ気味の、ややビッチの高い声で、ハイテッガーは私達の感謝の辞と来意に応じた。案外背は高くなく、大きな頭に広い額、口はやさしく笑つていたが、眼は偉

大人人間にのみ見られる澄明さと厳しさをたたえて、じっと私達に注がれていた。さし出された彼の手は大きく、やわらかく、大変暖かかった。

「存在」の解釈について

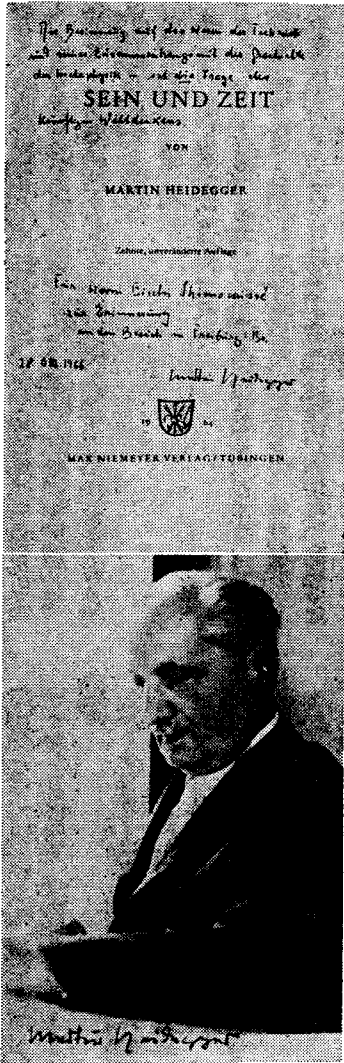
まず、片山先生の質問は一応出発に際してうかがってはいたが、今いちど日本語で云っていただいで、私が通訳をした。

「米国のシカゴに、パウル・ティリッヒ教授を訪問した際、当代の神学界、哲学界では専らリングイスティックな関心が過ぎ、実在の探求がないと云うことが話題になり、その節、ハイテッガー教授の存在をどう考えられるか、と質問したところ、ティリッヒ教授は、ハイテッガーは有限性のポートに乗って、無の霧の深い大海の彼方の神である存在の小島に辿り着こうと努力しているが、自分はそれは不可能だろうと思うことでした。私は「形而上学とは何か」

以来、無のヴェール——の存在——を通して存在を見出そうと云うハイテッガー教授の見方が一種の神秘性をおびて来ているように思われ、この比喩を大変面白くきました。

又、ニューヨークの近くのドゥリュー大学にカール・マイケルソン教授を訪れた折、彼もハイテッガー教授に深い関心をもっていたので、ティリッヒ教授の右のような存在の見解を話したところ、マイケルソン教授は、ティリッヒの存在の解釈は誤りであって、ハイテッガーの存在は現存在——人間の現存在——の存在であって、そこにあるもの——オブジェクト——として現われるもので、例えば片山さんがそこにいられる様に人間の現存在の存在として現われるものでなければならぬと申しておられました。

これらについて、ハイテッガー教授、あなたはどう思われるでしょうか」といのが片山先生の質問であった。



もらったサインとポートレイト

これに対して、ハイテッガーは「ティリッヒの存在の理解も、マイケルソンの存在の解釈も当ってはいない。私の云う存在とは存在者の存在であって、その存在者とは現存在に限られるばかり

でなく、あらゆる存在者の存在なので、何も神秘的なものでもなく、テイリッヒのいう様な神でもない。大変具体的なものである。だから、この机も椅子も貴方も存在者であって、そのようなあらゆる存在者の存在なのだ」

と云う返答であった。

そこで、私は方法論の問題について

「ハイテグラー教授、あなたの立場についてよく云われる。転回以前は、はっきりと解釈学的現象学の立場に立って、その方法論もはっきり示しもし、又それによって多大の成果をあげていられると思いますが、転回以後はむしろ、存在よりの語りかけというか、存在自身の方から自らを顕わすという風に変って来ているというのが、ハイテグラー哲学の一般的な解釈だと思えます。これが正しいとすれば、あなたは現象学の立場を放棄されたのでしょうか。」

ハイテグラー教授も良く御存知の三宅剛一先生が私の京大時代の恩師で、ハイテグラーの哲学を正しく理解する為にはフッセールの哲学をまず学ばねばならぬと云われて、私はフッセールをやり、現在もなお、シェラーの現象学について学位請求論文をマインツ大学で書いているのですが……」

と云うと、ハイテグラーは

「現代の優れた思想家達は皆現象学者である。転回以後の自分の立場も現象学と云ってよい。存在の現象学と云ってよいであろう。」

解釈学と云っても、私の立場はガダマーの云う様な解釈学ではないことは云うまでもない。私の解釈学は専ら存在に関するものである。

君も知っているだろうが、私は価値と云うものを認めない……。マインツと云えば、君はリヒアルト・ウィッサー君を知っているかね」

とハイテグラーは立って、当時まだ私講師になったばかりのウィッサー教授の『Die Verantwortung』という本を本棚から取り出して来た。

「勿論良く知っています。学問上も色々と助力を与えられ、お世話になっていきます」

と云うと、

「この本はついこの間、送って来てくれたのだが、彼は自分の立場を一番良く理解しているものだ。若いのが仲々優れた哲学者だと思う。思想家というのは孤独なもので、仲々正しく理解されることがないが、ウィッサー君は実によく自分を理解してくれている……」

と云って、彼のその著書のハイテグラーを取り扱っている最後の部分を私達に指し示したのであった。

「では、転回の前も後も、貴方の根本問題も、方法論も、究極的には一貫していると考えてよろしいのでしょうか」

という私の間に、ハイテグラーは大きく肯いたのであった。

一枚の写真

「ハイテグラー教授、あなたは偉大な業績を残されました。貴方なしには現代の西欧哲学は語ることは出来ません。」

しかし、次の世代に生きねばならぬ私達若い哲学者は新しい問題と課題を見出して行かねばなりません。私の場合はまだ、全く暗中

模索中です。

次の世代の若い思想家の爲に、あなたの立場から、何が一番根本問題であり、生涯をかけて思惟すべき課題なのでしょう。それを一つ、ここに書きとめていただけませんか」

と私はこの機会の爲にわざわざ持参した新しい「存在と時間」を彼に差し出した。

「ふむ。それは仲々大変むづかしい問題だな」

とハイテッガーは本を手にとると、自分の仕事机に向い、しばらく思いにふける風であった。

「君は私の『デヒニーク』の小冊子を知っているかね」

と云って、本棚より例のネスケ版の小冊子を取り出して、片山教授に手渡された。

「よく存じています。„Gestelle“が問題になってゐる……」

と私が云うと、ハイテッガーはもう一度、私達に背を向け、仕事机に向つて、やがて、*„Die Besinnung auf das Wesen der Technik und seines Zusammenhanges mit der Geschichte der Metaphysik—ist die Frage des künftigen Weltdekkens.“*

「デヒニークの本質及びそれと形而上学の歴史とのつながりを根源的にとらえなおすこと——が将来の世界思惟の根本問題である」と黒々と記してくれたのであった。(図版参照)

「これでよいでしょう。最近デヒニークの問題が私の心に懸つてい

る。それは西欧の形而上学の歴史に根づいていると私は思う」とハイテッガーはその問題の全貌と展開に色々と思いをさせるように、しばらくの間沈黙を続けたのであった。

古語に聞く

さき濁り

竹西寛子

多くの用例に通じているわけでもなく、知っているのはそれ一つだけという例なのに、忘れようもない言葉として、いつか「生きとし生けるもの」を取り上げたことがある。

時代は、その古今集の時代から江戸に下るけれども、内藤丈草に、郭公鳴くや湖水のさき濁り

という句があつて、この「さき濁り」も、他の例を知らないのに、印象鮮やかな一語として自分の筆に入ってしまったという感じがある。

そう言えば丈草には、目や耳にはつきり訴えてくる句が少なくな。

幾人か時雨かけぬく勢多の橋は、屏風絵を見るようであるし、大原や蝶の出で舞ふ臘月

にしても、蝶の舞う時間を詮索する気など起らなくて、自分もその情景の立会人のように思つてしまふ。

「さき濁り」は、漢字を当てれば「小濁り」「細濁り」となるらしい。この言葉はあまり使われていない造語

だったのだろうか。しかし、造語は無限にできるわけでもないし、造語が必ず生きのびるというわけでもないだろう。「さき濁り」については古語辞典の一本に一つだけ他の用例を見たが、それも比較的近年のことである。

「郭公」と「さき濁り」からの連想は当然五月雨になる。しかし同じ五月雨の頃の水でも、

五月雨を集めて早し最上川とか、

五月雨や大河を前に家二軒

などの水とは対照的で、琵琶湖の水のあわい不透明と、郭公の鋭い声とは、互に引き立て合いなから分離してはあり得ぬ句境を演出し、事実その演出に成功していると思う。

「生きとし生けるもの」の場合もそうであるが、この「さき濁り」にしても、一語としての音と意味、その両面からの印象もさることながら、前後に配される言葉の種類によっては、あるいは、現在記憶される「さき濁り」の表情や余韻とは違ふものを受け取っていたかもしれないといふことは思つている。

(たけにし・ひろこ 作家)

私は又、ハイテッガーの六十歳の記念論文集に出ていた、下から見上げるような、厳しい顔の写真を複写して用意していて、それもサインをお願いしたところ、早速サインをしてはくれたのだが、それが終ると急に立ち上り、本棚の横の引き出しから一枚の写真を取り出して、

「この写真の方がよい。これは私がメスキルヒで講演をしているときに撮ったものだ。これを君にあげよう」

とハイテッガーは云って、又その写真にサインをして私にくれたのであった。

その写真は一寸眼を閉じている様でもあり、又下のノートを見ている様でもある。実に温厚な、優しい横顔の写真であった。次の言葉がその唇からふともれそうなの、それでいて、今迄ぼつりぼつりと語りつづけて来たこの偉大な、年老いた思想家の感じが良く出ていて、私はハイテッガーの厚意に感激したことであった。

最後に、と云って、ひどく良く話題になる故九鬼周造教授との交遊の話になり

「パリで九鬼教授がサルトルにフランス語の家庭教師してもらった折、あなたの『存在と時間』を詳解して、サルトルがフライブルグの賣方のもとに留学することになったというエピソードはお聞きになったことがありますか」

とたずねたところ、ハイテッガーは

「第二次大戦直後、サルトルが私をフライブルグに訪ねてくれた時、パロン九鬼のことも色々懐しく話をした。サルトルもそのことを話していた。このデカルト全集がパロン九鬼のバリからのお土

産だよ」

と云って、ハイテッガーは西北の本棚の一番上段に並んでいる美しい皮装頓の全集を私達に指し示した。

もう少し、色々質問をしたとも思ったが、急な訪問でもあり、秋の陽もすっかり傾いて、ハイテッガーの仕事部屋はひとしお暗くなって来ていた。

片山教授と私はハイテッガーに幾度もその厚意を深謝して、ハイテッガー邸を辞したのであった。

ハイテッガー夫人は私達二人を前庭の柵のところまで見送り「またフライブルグに来られたら、いらっしゃい」

と私達にやさしい言葉をかけられたのであった。道路にはハイテッガーのお孫さんの坊やの影もなく、日はまさに暮れようとしていた。片山先生と私はすっかり興奮していた様で、ツェーリンゲンの州道に面した小さな旅籠屋グストハウスにその夜は一泊し、私は今はなき父に宛て長い手紙を書いた。

追記―残念ながら、私の亡父宛のこの手紙は、昨夏帰国した折、正確を期する為、母と共に探したのであったが、とうとうみつかることは出来なかった。又、片山先生より、先生の質問について正確を期する為、長文のお便りをいただいたが、ここに改めて先生の御厚意に深謝の意を表したい。なお、ハイテッガーと小生とのやりとりところで、先生の御記憶と小生のそれとがかなり喰い違っているところがあったが、今回は小生の記憶に従ってこの小文を書いた。この問題は小生の手紙が見出された時に、もう一度、照合して、正確を期する機会を得たいと思う。

(しもみせ・えいいち カリフォルニア州立大学ヘドミングエス・ヒルズ教授・哲学)